

この人と吉野川

ふるさとの川を美しく、人々の憩いの場に。
若い世代と手を携えて、未来へ種をまいています

NPO法人 江川エコフレンド 前理事長
岡田 年弘さん



柔和な笑顔と語り口がトレードマーク

平成30年11月には徳島市で三大河川シンポジウムが開催されましたが、初めての三大河川シンポジウムは平成27年、NPO法人 江川エコフレンドの主催で吉野川市において開催しました。立案や現地ツアーの手配など準備に奔走したことを思い出します。

江川沿いに育った私にとって、川は遊び場でした。プールよりも江川で泳ぎ、ホテイアオイで舟を作ったり、たらい舟での鬼ごっこ、瓶や仕掛けでの魚捕り……あの頃は、網で魚を伏せると必ず数匹のイモリやカワニナが入っていました。捕った魚は食卓へ上がるので、子ども心に川の恵みを知ったものです。初夏にはホテルが舞い飛び、人々にとって憩いの川でした。

一方、吉野川は「四国三郎」の名のおりの暴れ川で、私が子ども頃は、2〜4年に一度は大洪水となり、そのたびに阿波中央橋下流の木製の橋が壊されています。川の楽しさと怖さの両方を、ふたつの川から教えてもらいました。

江川湧水源は、夏季は冷たく10度前後、冬季は温かく20度前後になるという「異常水温現象」で知られ、徳島県天然記念物に指定されています。晩秋から冬には、温かい水面からの水蒸気が冷気に冷やされ、2mくらいの高さでもや(霧)

がかかるので、道路を歩く人の胸から上しか見られないという不思議な現象が起こります。昭和60年(1985)には環境省の全国名水百選に選ばれましたが、その頃から都市化の影響で、家庭排水による汚染が急激に進み、魚やカワニナの姿は消え、汚泥が溜まった川底には水草もまったく見られなくなりました。

平成4年(1992)に下水道が整備され、江川への廃水が改善され始めました。そんななか、行政・民間・企業が一体となって湧水源の継続的な環境美化に取り組もうと、平成12年に江川エコフレンド(現在はNPO法人)が設立されました。

平成16年には、江川沿いの鴨島第一中学校の皆さんも仲間に加わりました。今では400余名の団体となり、毎月1日朝6時30分から



↑三大河川シンポジウムのひとコマ。河川関係者が江川湧水源に集結。岡田さんの案内で現地ツアーも開催しました
→冬の江川湧水源。水面から、もやが立ちのぼっています

若い世代からのメッセージ

四国大学2年 笠原るり子さん(19歳)



吉野川の魅力を吉野川で伝えたい



吉野川って大きいので、何となく危険なイメージがあったんですが、授業で吉野川に行ったり、大学の窓から漁師さんが漁をしている姿をじっと見ているうちに、普段は穏やかで魅力的な場所だなと感じるようになりました。

また、私にとって吉野川は「吉野川であそぼう!」でのボランティアを通して、子どもたちとの川遊びの楽しさや面白さ、また吉野川の大きな魅力を知った大切な場所なんです。

子どもの頃は、吉野川と関わる機会があまりなく、「吉野川フェスティバル」に行ったことがあるくらいでしたが、徳島に住んでいて吉野川を知らないのはもったいないって思うんです。だから幅広い年代の方々と吉野川で出会い遊び語りながら、この川の魅力を知って欲しいと思います。これからも、人と人が自然と笑顔になれる不思議な川の魅力を、この吉野川で伝えていきます。

湧水源〜吉野川堤防〜江川鴨島公園一帯の清掃美化・環境保全に取り組んでいます。
また、平成16年には、江川下流の住民たちと「江川奉仕橋かもクラブ」を結成。清掃活動だけでなく、両岸400mに川底のヘドロで花壇を造り、花菖蒲、ユリ、水仙など四季の花が咲き誇る河川敷公園を目指しています。



清掃後の流しそうめんは、夏のお楽しみ



河川敷に花植えをする江川奉仕橋かもクラブのみなさん

ないと思います。私の勤務する吉野川市鴨島公民館では、昭和・大正時代の地域の記録、写真などを集めようと、昨年より「昔を語り合う会」という講座を始めました。資料を集めて、いつか「吉野川歴史資料館」が作れるといいなと思っています。